

市場メカニズム

考え方

1「限界収穫逡減」

2「規模の経済」

重要なのは、言葉で言うと曖昧だが、毎回絵や数字で表してきたが、ちゃんとした元があるということを理解してほしい。なんとなく限界が低減するとかではなく、そのような仕組みがどのようなになっているのかを理解してほしい。根本を理解してほしい。

需要曲線(右下がり)・供給曲線(右上がり)があって均衡点で市場が成り立っていなければ、自然と均衡点に調整されてくる。このようなメカニズムが市場にはある。

競争が効率性を生む。しかし最近の世界金融危機。

では市場メカニズムはだめなのか。

金融は競争だけでやるとバブルが発生する。そして逆バブルが発生する。金融には群集心理というものがあり、経済学にはこの群集心理が含まれていない。従って、金融においては経済学は役に立たない。なので市場メカニズムがすぐにダメだという結論にはならない。

なので競争から生じたバブルには規制が必要だし、政府の介入が必要である。経済は人の欲望で成り立っているのだから、バブルは起こらざるを得ない。なので 80 年生きていればだいたい 4 回はバブルに遭遇するだろう。

何が言いたいかというと、ある程度一般的に成立しそうな、セオリーを理解しておいてほしい。限界生産量は段々上昇幅が大きくなり頂点に達するが、やがて低くなり下がる。S字を斜めにしたようなグラフになる。これが限界生産量低減の法則。こういうことを、もう一度復習しておいてほしい。前々回の図をもう一回書。

210 ページが試験にでる。総固定費用
以前配ったプリントを見る。210 ページの図7. 3. 2を見る。これね。

産出量	総固定費用（機材等）	総可変費用（労働・燃料等）	総費用	平均固定費用	平均可変費用	平均総費用	限界費用
1	100	10	110	100	10	110	
2	100	16	116	50	8	58	6
3	100	21	121	33.3	7	40. 3	5
4	100	26	126	25	6. 5	31	5
5	100	30	130	20	6	26	4

こういう図を先週も書いた感じ。これを各自項別にグラフに表すと、横軸に生産量、縦軸に費用をとると、固定費用に関してはずっと100の直線、可変費用は少しずつ上昇する感じ、総費用はそれらの総和なので、それに平行して上昇してゆく感じのグラフ構成になる。

ここからが本番。だって先週やった話だから、ここからが本番です。

問題はこの平均費用。今から平均固定費用、平均可変費用、平均総費用、限界費用を赤字で上の図表に示す。

平均固定費用 = 総固定費用 ÷ 産出量

平均可変費用 = 総可変費用 ÷ 産出量

平均総費用 = 総費用 ÷ 産出量

という計算式なので、それぞれ計算すると、上図表の赤い値になる。

それぞれをグラフに表すと、縦軸に費用、横軸に産出量をとってかく。

この時に、さっき話した「規模の経済」、つまり平均費用はどんどん下がってゆくということ。これを規模の経済という。規模の経済、その一番の原因は、固定費用だろうか？可変費用だろうか？どちらだろうか？固定費用である。固定費用は産出量が伸びていけば平均すると落ちるので、それに乗じて平均総費用も落ちるという仕組みとなっている。

総可変費用というのがある。例えば材料とか、人件費とか。こういうものが急激に増える。総可変費用が急激に伸びる時がある。しばらく低いときは低水準だったのに。なのである点を過ぎると、平均可変費用が平均費用よりも大きくなり、ぐっと伸びるという形になる。これが規模の不経済である。

限界費用について。限界費用とは生産を追加的に一単位増やすために必要な追加的な費用。生産をY、費用をCとしたときに、限界費用は

$$\frac{\Delta C}{\Delta Y}$$

という式になる。グラフでいう傾きのようなものだ。

この限界という概念は競争によって生じる。目先の利益を追求するときにこの限界という概念がよく使われる。

で話に戻ると、あの表の話に戻ると、総費用に着目して追加的に一単位生産する際に追加的にどれだけ費用がかかったかということなので、引き算だね。表を青字で埋める。こんな感じ。

産出量	総固定費用（機材等）	総可変費用（労働・燃料等）	総費用	平均固定費用	平均可変費用	平均総費用	限界費用
1	100	10	110	100	10	110	
2	100	16	116	50	8	58	6
3	100	21	121	33.3	7	40.3	5
4	100	26	126	25	6.5	31	5
5	100	30	130	20	6	26	4

この時に、違うやり方でもこの答えは出る。さっきは次の産出量にかかる総費用から前の時にかかる総費用を引いて追加分の値を出していたが、違うやり方がある。

固定費用は固定なので、費用は一定である。よってこの値は無視しても構わないことになる。なので着目すべき値は総可変費用ということになる。

実は産出量6からは限界費用は大きくなっていき、20 となると202となっている。なので産出量が増えるに従って、固定費用は一定なのだが、可変費用が急激に上昇するといえる。

従って、縦軸に平均費用、横軸に産出量をとったときに、グラフはU字型のグラフとなるが、下がる最中の点をA、最下点をC、上がりかけをB、上がっている最中をDとする。あなたが工場を建てたいとき、どの規模の工場を建てればいいだろうか？俺はC。だって一個あたりの費用が一番低いから、費用を少なく作れる。

経済学の新古典派は人間の合理性というものを前提としている。つまり効率性を求める。

平均費用と限界費用について。グラフに書くと、

平均費用は緩やかなU字型を描く。それに対して限界費用は下から段々上昇し、やがて平均費用と交差するのだが、この交点は平均費用の最下点となる。

限界費用の意味だが、例えば工場を造るときに、限界費用というのは個別企業の供給曲線となるのである。それはどういうことかという、限界費用というのは、追加的に生産を一単位増やしたときにかかる費用のことである。で、価格というのは、その企業が受け取る収入である。

限界というのは常に追加的に増える費用と追加的に入ってくる収入とを比べて収入が大きければ当然生産を増やすのである。

例えば受け取る収入が時給の1000円で、追加的に一単位増やしたときの苦痛は900円相当だとすれば、もう一時間働くだらう。そういうことである。

なので、企業も工場を造るときに限界費用があつて、ある価格において追加的に一単位生産するかどうかを考える際に、当然追加的に一単位生産するときに得られる収入とかかる費用を比べる。そして収入が多ければ生産するだらう。それは収入と費用が等しくなるまで生産するだらう。これが限界という考え方である。なので、これが供給曲線となるのである。

限界費用の曲線が供給曲線なのである。

みんな何となく需要曲線供給曲線とか行っているが、その元、根本がどこか来ているのか、それをしっかり理解してほしい。そのときに上の表を使って、限界費用から供給曲線ができてくると言う課程を理解してほしい。

これを二つの工場で考えたければ。二つのグラフを足せば、社会全体の供給曲線が出来る。その場合グラフは単に縦に伸びるのではなく、右斜め上に伸びるということに注意。

限界収穫逓減については生産関数をやり、規模の経済では費用関数をやった。

市場経済というのは生産と消費から成り立っていて、生産は技術、消費は嗜好で成り立っている。